

太井・諏訪神社の例大祭

添田 悟郎

The regular festival of Oi - Suwa Jinja

Soeda Goro

神奈川県相模原市緑区太井に鎮座する諏訪神社では、毎年7月23日に近い土曜日に例大祭が執り行われ、山車と子供神輿が太井地区を巡行する。太井の山車は地元の住民によって製作された、重さが4トンもあると言われている総檜造りで、諏訪神社前の急坂を氏子総出で曳かれる姿は非常に見応えがある。また、小網飯縄囃子保存会によって伝承されている太井の囃子は、明治初期に首長(くびちょう)こと柳川長吉により伝承された、江戸の祭り囃子の系統だと考えられる「首長囃子」で、五人囃子に踊りが加わった演奏は非常にレベルが高い。太井地区では祭り囃子だけではなく、文化部や育成会などの各種団体も協力して祭礼を盛り上げている。ここでは令和6年(2024年)7月20日に行われた例大祭と、前日の宵宮の様子を紹介する。

Suwa Jinja, located in Oi Midori Ward, Sagami City, Kanagawa Prefecture, holds its annual festival on the Saturday closest to July 23rd every year, when floats and a children-mikoshi parade through Oi area. Oi's float is made entirely of Zelkova and said to weigh 4 tons, and it is a spectacular sight to see as the float is pulled down and up the steep slope in front of Suwa Shrine by all the residents. In addition, Matsuri-bayashi of Oi, currently passed down by "Koami-iinawa-Hayashi-hozonkai", is "Kubicho-bayashi" thought to be a descendent of "Edo-Matsuri-bayashi" and it passed down by "Yanagawa Chokichi" in the early Meiji period. Their performance which combines dance with five musicians, is extremely high level. In Oi's area, not only Koami-iinawa-Hayashi-hozonkai, but also various groups such as "Bunka-bu" and "Ikusei-kai" cooperate to liven up the festival. In this report, I introduce the annual festival held on July 20, 2024, and Yomiya, the day before the festival.

1. 諏訪神社

太井地区の鎮守である「諏訪神社」の祭神は建御名方命(たけみなかたのみこと)で、伝えられる説によると後鳥羽天皇の建久4年(1193年)に、筑井太郎二郎義胤が宝ヶ峰城を築いた時に勧請したものと言われている。天保6年(1835年)の村明細帳に「諏訪宮 縦七尺(2.3m)、横四尺(1.32m)、覆殿三間四方(29.7m²)、拝殿無御座候、勧請の年月相知れ不申候、祭礼毎年七月二十三日、湯花執行仕候」とある。

津久井郡神社誌には「寛政2年(1790年)の手水鉢、寛政12年(1800年)献上の石灯籠があり、また、嘉永4年(1851年)に神殿彩色、拝殿再建、覆殿屋根替、慶応2年(1866年)修理の棟札が残る」とある。嘉永4年(1851年)の修理は根小屋屋の大工であった大草佐吉によるもので、氏子代表の名主は荒川の角田六郎兵衛清忠と小網の梶野菊五郎経徳で、慶応2年(1866年)7月の修理は大工の西川藤右エ門によるものであった。

天保12年(1841年)完成の『新編相模国風土記稿』によると太井村の項に鎮守や鎮座地の記載はないが、次の4つの神社が記載されており、北根小屋組に諏訪大明神、荒川組に八幡大神、小網組に第六天が鎮座していた。これは村内の寺院で真言宗泉蔵寺の住職だった隆英が別当として管理していた。

八幡宮 例祭8月15日

第六天社 例祭6月15日

諏訪社 例祭7月23日 以上三社別当泉蔵寺

飯縄社 例祭1月24日 別当壽性院

明治維新の神仏分離令により神社を管理していた僧侶が継続して勤める場合には、僧籍を離れて復讐・改名して神職に変わることが命じられた。太井村では引き続き隆英が管理するのであれば還俗して神職になる必要があったが、泉蔵寺には檀家もあってこれはできなかった。代わりに神職を務める者が求められ、荒川組で名主を勤めていた角田六郎兵衛の息子である慎之助に白羽の矢が立てられた。明治2年(1869年)2月に太井村は神奈川県に慎之助の神職就任願書を提出して8月に許可され、角田大炊(つのだおおい)と改名して諏訪神社の官司になり、他の村内神社も兼務した。一応、大炊は泉蔵寺で新務をしていたとしているが、翌明治3年(1870年)12月の太井村『戸籍簿』によれば年齢は11歳としており、当面の対策として仕立てられたようである。諏訪神社は明治6年(1873年)7月30日に村社となった。

大正12年(1923年)の関東大震災の際に石垣が決壊し、大正15年(1926年)に覆殿修理と石垣工事が行われた。昭和27年(1952

年)12月22日に宗教法人法の神社として登記された。また、天王社が合祀されている。



図 1-1. 諏訪神社



図 1-2. 社殿



図 1-3. 第六天社



図 1-4. 境内

諏訪神社は当初太井 555 番地に位置していたが、津久井湖建設による県道つけかえのために昭和 38 年(1963 年)に現在地へ遷座した。以前の境内地には巨木の根が残されており、古老の話によると境内には樹齢 700 年以上も経過したと思われる松・杉・樺・ひばの木が茂って森を成していたが、飢餓の折にこの巨木を請い受けて、氏子の救済に当たった。樺の木は井伊掃部頭の門の冠木に用いられ、一部はひばの木であったので、祭りの時の旗竿を作ったと言われている。現在の境内には遷座碑があり、その碑文は次の通りである。

「 諏訪神社遷座碑

この諏訪神社は今から約七八四年前の建久四年(1193 年)に築井太郎二郎義胤が城山に在城のとき建御名方命をお祭りして津久井町太井五五番地に建てられたものといわれています。その後太井の鎮守として住民に親しまれてきました。ところが神奈川県が相模川総合開発事業の一環として城山ダムを建設することになり水没する県道の付けかえのため神社も移転することになりました。そこで昭和三十八年(1963 年)五月に現在地津久井町太井五〇六番地に新たに造営して祭神を遷座したものです。

昭和五十二年(1977 年)七月二十三日建立

小網自治会

諏訪神社氏子中」

現在の境内は西斜面に 1881^m2 の面積を有し、東は城山の自然林、西方は住宅地の小網と北根小屋地区を一望できる。次に境内の建造物を記す。

本殿 流造柿葺 1.6^m2

拝殿 入母屋造鉄板葺 26.4^m2

覆殿 鉄板葺 29.7^m2

鳥居 石造 昭和三十八年(1963 年)三月吉日 太井氏子中

社殿に向かって右側に第六天社が祀られ、この社は水没地であって遷座されたものである。社殿向かって左側には次の石仏等が

ある。

秋葉大権現灯籠 文化八年(1811 年)辛未年七月吉祥日

廿三夜塔 明治十三年(1880 年)

道祖神塔 昭和十七年(1942 年)一月十四日

灯籠 石造一對 昭和三十八年(1963 年)三月太井氏子中

諏訪神社遷座碑

手水鉢 年代不詳

2. 太井の歴史

天保 12 年(1841 年)完成の『新編相模国風土記稿』によると太井村の戸数は百十五、村高三四石一升九合(六位)、広袤東西一三町(10 位)、江戸より一四里で、往古は根小屋村も太井村に含まれていた様である。東は相模川を経て中沢村(旧城山町)に、西は中野村、北は相模川の対岸にある三井村、南は根小屋村と接していた。村の北部の境界を相模川が大きく蛇行し、その河岸段丘上に集落が作られ、小名として小網組・荒川組・北根小屋組があった。正保(1644~48 年)の図には太井村の側に荒川村があり、荒川は太井と別村になっていたが、その後は太井村の小名に属したとある。

太井村の慶長 9 年(1604 年)の総検地では田畑屋敷永四一貫六二六文が打ち出され、定納高永四〇貫六〇〇文、除地文として寿性院と泉蔵院がそれぞれ一間(軒)と確定した。名請人は永二貫文台の玄蕃を最高として計 60 人、うち屋敷名請人が 36 人となる。慶安 3 年(1650 年)の『津久井領絵図』では特に「太井のうち」と称し、「荒川・こあみ」を特記している。さらに本絵図の作成に関与した津久井領全 27 か村の名主 3 人連署の中に、三組の名主として九郎左衛門・小左衛門・助九郎の名が見える。当時の太井村が相名主(あいなぬし)制(同一所領の一村に複数の名主がいること)をとっていたことと、さらに村を構成する三組の独立性が強く、各組が一村としての性格を持っていたことが伺える。なお、同絵図で相名主制が確認できるのは太井村の他に、青根村・青野原村・長竹村・中野村と中沢村(旧城山町)、若柳村・与瀬村(以上、旧相模湖町)、吉野村・佐野川村・沢井村・日連村・名倉村(以上、旧藤野町)で、領内 27 か村のうち 13 か村が相名主制であった。

荒川組は津久井の名城城山古城跡山麓、相模川が大きく迂回する地域で、相模川と津久井往還が交差する水陸交通上最も要衝なところで、村行政の中心地であった。そのため、旧幕府時代には天領で代官支配の元に、水運・陸運による物資の流通を取り締まり、また税の徴収を兼ねた荒川番所(荒川五分一運上取立番所)が設置された。この荒川番所が初めて設置されたのは寛文 4 年(1664 年)頃といわれ、天和 3 年(1683 年)に大和守の移封によって天領となり、代官支配のもとに依頼幕末までの 210 余年に渡って設置された。荒川番所は幕領では比較的珍しいといわれた商品物資に対する徴税の目的で設置されたものとされ、関東地方河川の中でも特異な形態であって、経済的意義が大きいとされている。太井村は相模川舟運の基点であり、元禄 2 年(1689 年)には相模川河口の須賀浦(平塚市)へ上下する高瀬舟七艘の他に、漁船の唐網船 10 艘があった。

享保 19 年(1734 年)の『村鑑』によると番所の面積は六畝二一歩で、代官手代 1 人、下役 2 人が昼夜詰め、津久井県内村々から相模川や陸路を利用して出荷される林産製品に五分一の運上を課して徴収した。また入会秣場(いりあいまぐさば)の札銭、相模川の鮎漁運上や高瀬船運上も取り立てた。同書によれば川船役四艘分二四〇文を上納し、中沢村と太井村を結ぶ荒川の渡しには船二艘(馬渡船一艘・歩行渡船一艘)があり、この船頭給分として夏・秋に村々から一軒当たり麦・粟四升宛を取り立て、毎年 10 月には橋が架けられた。太井村の名主角田家は荒川組名主で、太井村全体の名主として村行政を監督した。荒川番所に近接して屋敷を構え、村方文書を伝承した。戦国時代甲斐国武田氏発給の朱印状模写三点があるが、これはかつて角田家が武田家に臣従したことを示しているのであろう。同書によれば集落のうち北根小屋組は根小屋村に接し、同村との境界になる城山御林は反別七四町余、本数 22,000 本があり、山守 2 人が置かれ、山守給として百姓一軒に鑑五〇文を出している。

昭和 30 年(1955 年)頃の太井地区の世帯数は現在とはほど遠く、約 75 世帯程しかなく人家もまばらで、大きく分けて城山の麓と現在の太井信号付近に人家があった程度であった。昭和 40 年(1965 年)3 月に相模川総合開発事業の城山ダム(津久井湖)完成に伴い、荒川は湖底に沈んだが、小網は一部が湖底に沈んだだけで大部分が残ったため、太井と小網は同等の認識が持たれている。

3. 祭礼の歴史

諏訪神社の例祭日は江戸時代後期には 7 月 23 日であったが、近年は 7 月 23 日近くの土曜日に行われている。太井地区では現在、3 つの神社の祭礼が執り行われ、下記に令和 6 年(2024 年)度の日程を記載する。

諏訪神社例大祭：令和 6 年 7 月 20 日(土) 神事 午後 1 時
第六天社祭礼：令和 6 年 9 月 8 日(日) 神事 午前 11 時
飯縄神社祭礼：令和 6 年 3 月 23 日(日) 神事 午前 11 時 当番(根小屋地区)

太井村の天明 5 年(1785 年)の『荒川牛頭天王初(始)り』には、太井村荒川に牛頭天王社を祀った経緯が記されており、鎮守とは別に村を挙げての祭りを執り行ったことが分かる。

「天明三年(1783 年)不作。四年(1784 年)春凶作、百文につき米三合で売買されている。夏より大役(疫)病がはやり、白岩坂に杉の葉で厚板に屋根をふいて牛頭天王を祀った。しかし、疫病はおさまらず村中が煩ったので、荒川八幡宮に宮を移し、天明五年初めて祭礼を始めた。六月十一日、御かりや(仮屋)へ移し、村中一軒ずつ天王さまをお廻し、祇園ばやしで廻った。十五日夜はお浜下り、又祇園ばやしでお宮にお入れた。

天明六年(1786 年)からは、軒別のお廻りは取り止め、大通りを十一日にお廻り、これを例に年々祭礼を行う。

御祭礼六月十一日 村中祇園ばやしにて廻る 御仮屋は十五日まで 十五日は御浜下り 元の御宮の御入れする 六月十五日より年々湯の花を行う

右は村中安全悪病を除け、子孫長久のため長く仕るべく候、以上 天明五年巳六月 荒川 角田六郎兵衛 定め置く」

この資料は天明の飢饉のさなかのことで、2 年後の天明 7 年(1787 年)の暮れには津久井県内外を揺るがす「土平治騒動」が起こっている。筏(いかだ)流しや高瀬船運行による川稼ぎの村とはいえ、疲弊の状況は他の村々と同様であったと推測される。疫病退散のために新たな一社を建立し、村を挙げて村中の安全を祈願した村民の強い意思が伺える。その後も上記のような行事は夏祭りとして受け継がれ、祇園ばやしで練り歩くのはいつ頃から途絶えたのかは定かではないが、勇壮な御浜降りは城山ダムができるまで行われてきた。牛頭天王は祇園天神とも呼ばれた京都祇園社の祭神で、津久井県内各地にある「天王様」は疫病除けの神として祀られてきた。太井村で天王社の祭礼が定着した 3 年後に、似たような天王社勧請の動きが青野原村にもあった。

近年は境内に露店が並び、宮入り後には山車小屋に設営された舞台にて、舞踊やカラオケなどの素人演芸が開催されていたが、令和元年(2019 年)に発生した新型コロナウイルス感染症の影響により、収束後にこれらは無くなっている。また、宮入りの時間はコロナ前は 20 時頃であったが、コロナ明けは 18 時頃と早まっている。

4. 祭礼準備

ここからは令和 6 年(2024 年)7 月に行われた諏訪神社の祭礼の様子を紹介する。大祭前の 7 月 14 日(日)は朝 8 時に諏訪神社へ集合し、諏訪神社参道の提灯張りや山車の移動、および山車の掃除などが行われる。山車の移動は諏訪神社から祭礼のメイン会場となる小網地域センターまでであるが、総檜造りの山車の重さは約 4 トンもあり、諏訪神社前の急坂を降りるには多くの人出が必要となる。山車の移動は準備の一環であるが、多くの太井住民が参加する一大イベントとなっており、非常に見応えがある。



図 4-1. 山車を出す



図 4-2. 山車の掃除



図 4-3. 配線の準備



図 4-4. 山車の移動

山車が小網地域センターに到着すると、車輪のグリスアップなどのメンテナンスが行われ、最後にブルーシートを被せて宵宮まで駐車場に置かれる。敷地の外側には地元の子供たちが描いた燈籠が飾られ、大祭当日に使われる底抜け山車の掃除も行われる。準備が全て終わったのは 11 時頃であった。



図 4-5. 地域センターに到着



図 4-6. 車輪をグリスアップ



図 4-7. 燈籠を設置



図 4-8. 底抜け山車の掃除



図 5-7. 地域センターに到着



図 5-8. お菓子を投げる踊り手



図 5-9. お菓子を受け取る子供達



図 5-10. 宵宮後は提灯を外す

5. 宵宮

5-1. 準備

ここからは令和6年(2024年)7月19日(金)に行われた宵宮の様子を紹介する。宵宮では20時から山車の巡行が行われるが、小網飯縄囃子保存会は小網地域センターに10時に集合し、夜の巡行に向けて昼の12時頃まで山車の準備を行う。



図 5-1. 山車の畳を干す



図 5-2. 獅子舞を陰干し



図 5-3. 提灯の取り付け



図 5-4. 太鼓の設置

5-2. 山車巡行

宵宮では20時から約1時間掛けて、小網地域センターから国道413号沿いにあるファミリーマート津久井太井店の間を山車が往復する。山車が小網地域センターに戻ると山車の上からは踊り手により子供たちにお菓子が投げられ、この行事は大祭の休憩場所と宮入り後にも行われる。宵宮での演奏は20時50分頃に終わり、後片付けをして22時20分頃に解散となる。



図 5-5. 地域センターを出発



図 5-6. ファミリーマートに到着

6. 大祭

6-1. 準備

ここからは令和6年(2024年)7月20日(土)に行われた例大祭当日の様子を紹介する。大祭当日は朝8時から準備が行われ、小網地域センターでは小網飯縄囃子保存会が山車の準備を、文化局がテントの設営を行う。小網飯縄囃子保存会は山車の準備を終えると底抜け山車の出発地点へ移動し、底抜け山車の準備を行う。



図 6-1. テントの設営



図 6-2. 締太鼓を増し締め



図 6-3. 提灯の設置



図 8-4. 舵取りハンドルの取り付け



図 6-5. 底抜け山車の飾り付け



図 6-6. 太鼓を設置

6-2. 底抜け山車巡行

コロナ前までは一日かけて山車で太井地区を巡行していたが、曳き手の負担軽減のために巡行の前半は、新しく製作した手押し型の底抜け山車で太井地区を回る。底抜け山車は11時15分頃に氏子宅を出発し、金棒に先導されて国道413号の北側を巡行し、大道寿司で最初の休憩を取る。大道寿司を出発すると国道413

号を横断し、今度は国道の南側を巡行して、宵宮の休憩場所でもあったファミリーマート津久井太井店で2回目の休憩を取る。

ファミリーマート津久井太井店を出発した底抜け山車は直ぐに小網地域センターに戻らず、太井地区の南東部を巡行してから小網地域センターで3回目の休憩を取る。コロナ前までは山車で坂(いろは坂)を登って国道65号(厚木愛川津久井線)の方まで巡行していたが、現在は坂の手前で左折して諏訪神社付近を巡行する。休憩後に底抜け山車は小網地域センターを出発し、13時過ぎに出発地点の氏子宅に戻って巡行を終える。



図 6-7. 氏子宅を出発



図 6-8. 津久井湖沿いを巡行



図 6-9. 大道寿司で休憩



図 6-10. 国道 413 号を移動



図 6-11. ファミリーマートに到着



図 6-12. 駐車場で演奏



図 6-13. 諏訪神社付近を巡行



図 6-14. 地域センターに到着

6-3. 例大祭神事(式典)

13 時からは諏訪神社の社殿にて、太井の西隣に位置する中野地区鎮座の中野神社の宮司により例大祭の神事が執り行われる。神事が終わると社殿横に設置された忌竹にて、神輿渡御に際して神事が執り行われ、御霊遷しや玉串拝礼などが行われる。



図 6-15. 例大祭神事



図 6-16. 祝詞奏上

6-4. 子供神輿渡御

神輿前で神事を終えた育成会は 13 時 50 分頃に諏訪神社を出発し、子供神輿が太井地区を渡御して行く。子供神輿は担いで渡御されるが、子供の数と疲労の状況に応じて台車での移動に切り替えられる。なお、大人神輿はコロナ前を最後に、担ぎ手不足のために渡御がなくなっている。山車と子供神輿は別々での巡行となっているが、山車の休憩場所である 3 箇所は全て子供神輿の休憩場所となっていて、休憩が重なる時間帯がある。子供神輿の最後の休憩場所は山車と同様に小網地域センターになっており、山車より早い 17 時 15 分頃に諏訪神社へ宮入りする。



図 6-17. 宮立ち



図 6-18. 地域センターに到着



図 6-19. 休憩場所を出発



図 6-20. ファミリーマートで休憩



図 6-21. 地域センターを出発



図 6-22. 宮入り

6-5. 山車巡行

お囃子の巡行に関しては前半は底抜け山車で言うが、後半は本山車にて行っている。コロナ前までは神輿の宮立ち前に諏訪神社に山車を移動させ、神輿と共に諏訪神社を出発して太井地区を巡行していた。

15 時頃に小網地域センターを出発した山車は国道 413 号を左折して中野方面へ進み、途中で右折して北へ向かい、底抜け山車の発着場所である氏子宅で最初の休憩を取る。氏子宅を出発した一行は再び国道 413 号に出て右折し、左手にあるファミリーマート津久井太井店で 2 回目の休憩を取る。



図 6-23. 地域センターを出発



図 6-24. 国道 413 号を移動



図 6-25. 休憩場所に到着



図 6-26. 再び国道 413 号を進む

ファミリーマート津久井太井店を出発した山車は小網地域センターで最後の休憩を取る。子供神輿が諏訪神社に宮入りすると、今度は山車が小網地域センターを出発し、最終地点の諏訪神社へ向かう。太井地区の巡行を終えた山車は最後の難所である急坂を登って 17 時 40 分頃に宮入りする。



図 6-27. ファミリーマートに到着



図 6-28. 地域センターに到着



図 6-30. 宮入り

宮入り後は山車の前に子供たちが集まり、山車の上からお菓子が投げられる。18 時過ぎに囃子の演奏が終わると山車を山車小屋へ収納し、小網飯縄囃子保存会は小網地域センターにて直会を行い、解散は 20 時頃となった。なお、翌日の 7 月 21 日(日)は朝 8 時から後片付けが行われた。



図 6-31. お菓子を配布



図 6-32. 山車小屋に収納



図 6-33. 山車小屋の戸締り



図 6-34. 地域センターで直会

7. 囃子

太井村の天明 5 年(1785 年)の『荒川牛頭天王初(始)り』によると「祇園ばやし」の記載があり、この祇園ばやしがどのような囃子であったかは不詳であるが、何らかの理由で江戸時代後期に

消滅したと推測される。

現在、太井地区に伝わる囃子は明治初期に首長(くびちょう)こと柳川長吉により、小網と荒川(現津久井湖湖底)に伝承された「首長囃子」であり、首長囃子は江戸の祭り囃子の系統を引いていると考えられる。小網と荒川が習ったのはほぼ同じ年代だと推測されるが、昔から小網と荒川は距離は近いが囃子はどこか違うと言われ、小網の囃子は小バチが多くてテンポが早く、身体を使って叩くので見ていて飽きないなどと良く言われ、聞く囃子より見る囃子だとも言われて来た。雲居寺峰の柳川長吉之碑の台座に刻まれている弟子たちの中には、小網の若者たちの名前が含まれている。

小網ではこの首長囃子を伝承する団体は「小網囃子連」として始まり、以降は先人によりこの首長囃子が継承されてきたが、昭和 40 年(1965 年)に津久井湖が完成した頃に、諸般の事情により何年か囃子が途絶えてしまった。しかし、伝統芸能の継承に危機感を抱いた青年会が「清和会」を結成して囃子を復活させ、現在は「小網飯縄囃子保存会」として活動している。

楽器の構成は笛 1・鉦 1・締太鼓 2・大太鼓 1 の五人囃子で、曲目は「昇殿(しょうでん)」・「四丁目」・「にんば/いんば」・「もどき」・「屋台」・「ねんねん」・「なかぬきり」があり、かつては「鎌倉」が入っていたが現在は残っていない。太鼓に使うバチは朴木(ほうのき)製で軽く、大太鼓は締太鼓より長めに作られている。全体的にテーパード状で先端が細くなっていて、特注で作られている。囃子には踊りが伴い、おかめや狐などの面や獅子頭を所有している。



図 7-1. 山車での演奏



図 7-2. 朴木(ほうのき)のバチ



図 7-3. おかめ等の面



図 7-4. 狐の面



図 7-5. 獅子頭(雄・大)



図 7-6. 獅子頭(雄・中)

太井地区では囃子の練習を一年を通して毎週火曜日の 19~22 時に小網地域センターで行っており、諏訪神社の例大祭がある 7 月に入ると日曜日、月曜日、祝日以外は大祭前まで毎日練習が行われる。



図 7-7. 囃子の練習



図 7-8. タイヤを使った練習

小網飯縄囃子保存会は 7 月の諏訪神社の例大祭以外にも年間を通して囃子の演奏活動を行っており、1 月元旦の獅子舞、老人ホームの慰問、4 月初めのおきる野市引田の祭礼、4 月中旬の鳥屋囃子交流会、8 月は中澤囃子の集いと城山の祭礼、9 月の地元第六天社の祭礼と小金井貫井の祭礼、10 月の津久井やまびこ祭りなどに参加し、これ以外にも依頼を受けた祭礼やイベントなどに参加している。

8. 首長囃子

津久井郡下に広く祭り囃子を伝承した「柳川長吉(やながわちょうきち)」は、嘉永 6 年(1853 年)に西多摩の小曾木村黒沢(現・青梅市)で生まれ、明治 30 年(1897 年)に三沢村中沢(旧・城山町中沢)にて赤痢により 44 歳という若さで没している。柳川長吉が伝えた囃子は「首長(クビチョウ)囃子」と呼ばれ、若い頃に埼玉の間野(現・飯能市)で習い覚えた囃子を、「黒沢ばやし」として故郷に伝え残し、二十歳前後に若者数人と共に鳥屋へ来てこの黒沢ばやしを教えたのが、津久井における首長囃子の始まりであったという説がある。なお、長吉は首が傾斜していたことから「クビチョウ」という呼び名で通っていたようである。

首長囃子の伝承は全て口伝であったため、地域によって太鼓および笛は一律ではなく、現存する曲目を全て長吉が教えたかどうかも定かではないが、江戸末期より津久井各地にあったと思われる目黒系や稲城系の祭り囃子に黒沢系の曲が加わった可能性が考えられる。戦中戦後は祭り囃子が各地で途絶え、その後に復活した地区もあるが、現在、柳川長吉の直系の首長囃子を伝承している地区は数少なくなっている。「クビチョウ」という名前は津久井郡下、青梅市黒沢、あきる野市でも伝え聞き及んでいる人が多く、百年余りの年月を経てもなお遠く隔たった津久井と西多摩(青梅市・あきる野市)で同じ曲が演奏されていることは驚きである。

柳川長吉と首長囃子の詳細は殆ど判明していなかったが、相模川流域調査(無形文化財)における神奈川県立博物館の調査により、津久井を一望できる根小屋雲居寺峰(津久井町)で『柳川長吉君の碑』が発見された。その台座に刻まれていた銘文には津久井郡下で首長囃子に関わった地名や弟子の名前の一部が刻まれており、旧津久井町では上鳥屋(かみどや)・関・寺沢・川和・小網・不津倉(ふづくら)・亦野(またの)・荒川、旧相模湖町では阿津(あづ)、旧藤野町では名倉、旧城山町では中沢が判明した。しかし、その後の度重なる道路工事で散逸した部分が多く、雲居寺に記念碑の台座の一部が保管されているとの記録が残っていたが見つかっていない。

柳川長吉は故郷には戻らずに津久井内に留まり、結婚して子供もあったが若くして没している。昭和 40 年(1965 年)頃に関き取

り調査をした際における中沢の故老の話によると、長吉の息子や娘と遊んだ記憶があることのことである。また、長吉は明治時代としてはモダンで、洋服と革靴を身に付け、中折れ帽子を被っているのを良く目にしたという。長吉が祭り囃子を教えるために津久井各地の村の弟子宅に長い間逗留し、寝食を共にして伝承したという言い伝えがあるが、それが中沢に居を構える前の時期かどうかは定かではない。

○柳川長吉 年表

嘉永 6 年(1853 年)・・・小曾木村黒澤地区(現青梅市黒沢二丁目)に父柳川文次郎の次男として生まれる。

明治 4 年(1872 年)・・・霞村(現青梅市師岡付近)の小作與右エ門の遺跡を相続する。

(不詳)・・・小曾木村の若林仙十郎小若一座(万作踊り・お囃子・歌舞伎・里神楽を演じた)に入り、座長若林仙十郎から黒澤・岩蔵・古武士・荒田等の若い衆約 20 名と共に伝授する。

(不詳)・・・間野(現飯能市間野)にてお囃子を伝授する。

(不詳)・・・引田村(現あきる野市引田)にお囃子を教える。

(不詳)・・・鳥屋村(旧津久井町鳥屋)の丹沢の山に金塊が出るとの噂を聞き、仲間数人と金塊堀りに向かい、金塊が不採掘であったが帰郷せずにそのまま鳥屋村に滞在する。

(不詳)・・・鳥屋村の上鳥屋地区にお囃子を教える。

(不詳)・・・青山村の関地区に滞在してお囃子を教える。

(不詳)・・・鳥屋村の娘と結婚する。

明治 14 年(1881 年)・・・5 月 3 日に長男渉が出生し、以後数年間に子供三女が出生する。

明治 20 年(1887 年)・・・三沢村の中沢(旧城山町中沢)の某家の遺跡を相続する。

明治 24 年(1891 年)・・・長男渉が東京市牛込区矢来町(現東京都新宿区牛込)の真坂家へ養子として転出する。

(不詳)・・・荒川村(現津久井湖底)や旧小網村(旧津久井町大井)等にお囃子を教える。

明治 26 年(1893 年)頃・・・三沢村の中沢にお囃子を教える。

明治 28 年(1895 年)・・・長男渉が離縁して長吉の元へ帰る。霞村(現青梅市師岡付近)へ転住する。

(不詳)・・・再び三沢村中沢へ転住する。三沢村中沢の木上家の作代として従事する。長吉家族が木上家の離れに居住する。

明治 30 年(1897 年)・・・8 月 11 日に長男渉が赤痢にて没する(16 歳)。9 月 9 日に長吉が赤痢にて没する(44 歳)。亡骸が三沢村中沢の木上家に埋葬される。

(不詳)・・・妻子が鳥屋村に帰郷する。

(不詳)・・・「柳川長吉君之碑」が根小屋村(旧津久井町根小屋)の雲居寺峰に建立される。

(不詳)・・・同碑が根小屋村の雲居寺内に移転される。

昭和 44 年(1969 年)・・・首長囃子関係保存会により「首長ばやし由来書」が作成される。

平成 14 年(2002 年)・・・柳川長吉氏記念碑建立発起人会が設立される。

平成 15 年(2003 年)・・・「柳川長吉之碑」が城山町中沢の木上家の墓地の一角に建立される。同氏記念誌「百余年の囃子の響

き」が作成される。9月7日に柳川長吉之碑建立記念式典が開催される。

○戸籍

神奈川県津久井郡三沢村中沢 461 番地

柳川長吉

嘉永 6 年 8 月 17 日 生まれ

明治 4 年 1 月 1 日 同府同郡小曾木村黒澤 柳川紋次郎二男が小作與右エ門の遺跡を相続

明治 28 年 5 月 10 日 東京府西多摩郡霞村師岡に転住

明治 30 年 9 月 9 日 死亡

小作 涉

明治 14 年 5 月 3 日 生まれ

明治 20 年 11 月 16 日 願満し廃嫡

明治 24 年 9 月 30 日 東京市牛込区矢来町 真坂忍離婚？

明治 28 年 5 月 10 日 父長吉に従い転住

明治 30 年 8 月 11 日 死亡

明治 40 年 9 月 20 日 横浜裁判所の許可を得て抹消

9. 山車

太井地区では明治初年頃から山車の巡行が始まり、明治に建造された山車を曳いてきたが、昭和 61 年(1986 年)7 月 26 日(土)の諏訪神社例大祭の夕方の巡行中に山車を転倒大破させてしまった。その後の諏訪神社例大祭では壊れた山車を曳き回さず、諏訪神社の境内で山車を固定して囃子を演奏していたが、このままでは囃子の存続が危ういと判断し、当時の自治会役員であった大工・中島正年氏に相談したところ、自治会員のボランティアを募って山車を新規で製作することになった。

山車の製作に際して財政面を何とかしようことになり、自治会役員に図った結果、平成元年(1989 年)に山車建設委員会を発足させて寄付を募ることになった。この時に集まった寄付により山車だけではなく、諏訪神社の境内に山車小屋も建造した。山車の製作場所は梶野芳三氏の庭を借りてお仮小屋を立て、材料は全て樺ということではいろいろな所から材料を寄贈してもらった。樺は乾燥させるのに時間が掛かるため、山から切ってきた樺を材木屋で乾燥させた樺と交換してもらった。なお、総樺造りの山車の重量は約 4 トンにもなり、太井地区の多くの住民が参加しないと重い山車が出せない様に、あえて総樺造りにしたという。山車はほとんどが地元の大工による手作りであるが、彫刻と車輪関係は専門の業者に依頼した。



図 9-1. 太井の山車



図 9-2. 山車の彫刻



図 9-3. 柱の龍



図 9-4. 後年に追加された燈籠

着工から丸 2 年の平成 3 年(1991 年)に山車はほぼ完成し、その後も引き続いて作業を行い、現在の山車が完成した。完成した山車は明治時代に建造されたそれまでの山車よりも遥かに大きく、古い山車は又野の八幡神社に譲渡され、又野では大破した部分を修理して現在でも八幡神社の例大祭で曳いている。



図 9-5. 又野の山車(旧太井の山車)



図 9-6. 巡行の様子

太井地区では山車の曳き手の減少に伴い、山車の巡行の時間を減らし、その代わりに令和 3 年(2021 年)に手押し型の底抜け山車を製作して、例大祭の囃子の巡行の前半にこの底抜け山車で太井地区を巡行するようになった。なお、底抜け山車で使う太鼓は専用のサイズのものを新調した。



図 9-7. 底抜け山車



図 9-8. 新調した専用の太鼓

10. 神輿と御浜降り

太井では大人神輿 1 基と子供神輿 1 基があり、コロナ前までは山車と共に太井地区を渡御していたが、コロナ明けからは子供神輿だけとなっている。大人神輿は現在の山車が新調された平成 3 年(1991 年)頃に新調されたもので、それ以前は第六天社の社殿に保管されている古い神輿を担いでいた。この古い神輿の製作年代は不詳だが、囃子が始まったのと同時期である明治頃の製作と推測される。なお、大人神輿の掛け声は「オイサー」であった。



図 10-1. 大人神輿



図 10-2. 子供神輿

神輿渡御の始められた年代は不明であるが、太井村の天明 5 年(1785 年)の『荒川牛頭天王初(始)り』によると、神輿の記述は無いが文面からは御浜下りを含め神輿の渡御が行われていた

と推測され、その後の諏訪神社の例大祭にも受け継がれてきたと考えられる。諏訪神社の例大祭では特徴的な「御浜降り」が行われ、津久井湖が建設されるまでは元第六天社のあった近くの相模川にて、移転後は津久井湖の側で行われていた。



図 10-3. 旧大人神輿



図 10-4. 2019 年の渡御の様子

例大祭当日の 14 時に大人神輿と子供神輿、そして山車が諏訪神社を出発して集落内を巡行し、大人神輿の渡御の途中の 15 時 30 分頃に津久井湖に神輿が降りて湖畔に置かれ、大人神輿の鳳凰だけを外して鳳凰の軸(脚)を湖の水に漬け、鳳凰を再び神輿に挿し直して渡御を再開した。

1 1. むすび

相模原市は私の自宅から距離があり、私自身が演奏している祭り囃子の系統とも異なるため、今まで相模原市内の祭礼を取材する機会は無かったが、偶然にも厚木市荻野で取材をさせて頂いた方の伝手で、今回初めて相模原市の太井という地区で取材することが出来た。残念なことに、大人神輿の渡御はコロナの影響と担ぎ手の減少の為に行われなかったが、太井地区には総擲造りの立派な山車と、その山車にふさわしい非常にレベルの高い祭り囃子が伝承されており、山車が太井地区を巡行する光景はまさに圧巻である。

太井に伝わる祭り囃子は“首長囃子”と言われるが、首長囃子の伝承者である柳川長吉に関する情報は文献からかなり詳しく知ることができ、相模原市域の祭り囃子の歴史を語る上では欠かせない人物となっている。長吉は 44 歳という若さで他界しているが、明治年間に旧津久井郡下で広範囲に渡り首長囃子を伝承しており、祭り囃子の伝承者としてこれほどまでに記録が残されている人物は非常に珍しいと言える。長吉の祭り囃子の技量が優れていたことは疑いのないことであるが、私個人としては、長吉の卓越した人間性が、多くの人々を魅了してきた結果だと考えている。

私自身も祭囃子を伝承する一人として、演奏技術だけではなく、祭囃子に対する向き合い方というものに関して、常に追求していきたい。

太井地区に限ったことではないが、太井の地は都心から離れた場所に位置していることと、昨今の少子高齢化の影響もあり、祭礼に携わる人の数が減少し、祭礼の伝承には非常に苦労されている様子が伺える。山車の巡行経路の縮小などもその一つであるが、山車を曳く負担を減らすために底抜け山車を取り入れた巡行や、この他にも神社役員や文化部、育成会などの各種団体が協力して祭礼を運営している姿には非常に感銘を受けた。今後もこの素晴らしい祭礼が末永く後世に引き継がれていくことを祈願したい。

○参考文献

- 『大日本地誌体系 新編相模国風土記稿 第五巻』
雄山閣 (1970)
- 『津久井町郷土誌』 津久井町教育委員会
津久井町郷土誌編集委員会 (1987)
- 『津久井郡文化財 神社編』
津久井郡文化財調査研究会 (1987)
- 『城山町史 4 資料編 民族』 城山町 (1988)
- 『津久井郡文化財 民俗編』
津久井郡文化財調査研究会 (1993)
- 『城山町史 6 通史編 近世』 城山町 (1997)
- 『柳川吉之碑建立記念誌 百余年の囃子の響き』
柳川長吉之碑建立記念誌編集委員会 (2003)
- 『相模原市域 祭り囃子 神社と祭礼 上溝夏祭り』
相模原市中央区上溝 番田はやし連 (2015)
- 『津久井町史 通史編 近世・近代・現代』
相模原市教育委員会教育局生涯学習部博物館 (2015)



作成 : 2025 年 2 月